

日点委通信

No.41

2025年11月 1 日発行

「日本の点字」が創刊50号を迎えます

日本点字委員会 副会長 金子 昭

「日本の点字」が創刊50号を迎える。1971（昭和46）年9月の創刊である。1966（昭和41）年7月に日点委が発足し、1971（昭和46）年3月には『日本点字表記法（現代語篇）』が発行された。

肥後基一（第2代会長）は「創刊にあたって」で、《各出版所や図書館によって独自の表記法を採用している向きもあり、これらを調整し統一することが本委員会に課せられた第一の仕事であった。幸いにして相違点を一応統一し、今回『日本点字表記法（現代語篇）』として出版することができた。今回は相違点を統一することに主眼が置かれ、真に体系化を図るためにはなお残された課題も少なくない。古典の表記法・数学記号・理化学記号などをめぐる問題も多い。今後委員会としてはそれらの問題に取り組むつもりではあるが、その経過を多くの方に知っていただくとともに、ご意見も賜わりたいと考え、この広報を創刊することにした》と記している。

この趣旨は今も変わらず、50号を迎えるに至った。目次を通覧すると、先輩方の努力の足跡を読み取ることができるように思う。これからも点字を守り、育てるために、100号、150号に向けて歩みを進めていくことを願っている。

『試験問題の点字表記 第3版』を発行！

日本点字委員会は、2025年11月1日に同書を発行した（近日中に発売予定）。

同書は、2007年に発行した第2版以降の試験問題をめぐる状況の変化及び点字表記の変更等を踏まえて、試験問題を点訳する上での手順と注意事項等を、3部構成で編集した。

第1部では、点字表記そのものについて述べ、『日本点字表記法 2018年版』の諸規則との対応関係をも示した。第2部では、試験問題の点字表記の実際と問題冊子の作成手順等について具体的に記述し、各教科や図表への対応についても詳述した。第3部では、点字試験問題の書き方の形式の現状を、用例を示して説明し、全国規模で実施される試験の点字問題の実例をも紹介した。

墨字124ページ1,500円、日本点字委員会まで。点字全2巻6,000円、点字図書給付事業対象、日本点字図書館点字製作課（TEL03-3209-0671）まで。

大阪・関西万博において点字体験イベント開催！

日本点字委員会 会長 渡辺昭一

2025年4月13日に開幕した大阪・関西万国博覧会において、おそらく万博史上初めての点字名刺づくり体験イベントが開催された。

この事業は、毎日新聞社が呼び掛けて結成したビジョン・コンソーシアムが主催した「視覚障害の世界を体験する」の一コーナーとして実施され、点字考案200年記念事業推進委員会が担当した。日点委は、その中心メンバーとして、当日の要員配置をはじめ、協力者の呼び掛け・集約や資料作成等の準備を行った。

4月19日（土）～24日（木）の期間中、会場となった「ギャラリーWest」には5,000名が訪れ、点字体験コーナーにも676名が来場した。その中には、毎日複数の外国人の参加があり、アルファベットでファースト・ネームなどを点字器で書き、視覚障害当事者がそれを読み上げて正しく記載されていることがわかると、「Oh!」と大きな歓声をあげて、感動の様子を表現した。6日間で、431名が点字名刺づくり体験を行った。

なお、このイベントに合わせて、新たに日点委の「点字を読んでみよう！」の英訳版を作成し、墨字版・点字版をホームページにアップした。

「第4回点字考案200年記念事業 in Sight World 2024」から

標記記念事業が、2024年11月1日（金）に、すみだ産業会館で開催された。

午前の部のテーマは、「日本における点字普及の課題を考える～触図を中心に～」で、コーディネーターの奥野真里氏からの報告ののち、3人の発表があった。

1. 「触図」の限界を踏まえた対応について考える（大内進氏）。「触覚教材」を考えるに当たっては、触認知の特性を理解して対応していく必要性について語られた。

2. 点字利用推進のための課題 ― 点図・触図の活用（長岡英司氏）。点字の有効利用を推進するうえで触図の普及が重要との視点から、日本点字図書館の事例を中心に、その取り組みについて報告された。

3. キム・テス氏。キム氏は韓国の触覚ディスプレイDotPadの紹介と実演を行った。

午後の部のテーマは、「11月1日今日は日本点字134歳の誕生日～パソコン点訳～」で、高橋恵子氏の趣旨説明ののち、2名の発表があった。

4. パソコン点訳のこれまでの歩みとこれから（大鐘俊也氏）。自動点訳システムの開発についての紹介があった。

5. 豊かに広がる点字の可能性（木川友江氏）。パソコン点訳の導入により点訳の高速化・効率化が実現していることが、個人の読者としても、点字図書館職員としても、大いに助かっている旨の報告があった。

参加者は、午前の部80名、午後の部60名であった。このうち、大内氏と長岡氏の発表を、年度内発行予定の「日本の点字」第50号に掲載する。

2025年度日本点字委員会総会及び研究協議会報告

2025年6月7日（土）9：40～16：20、日本点字図書館及びオンラインにより行った。出席者は、委員18名、事務局員3名、会友6名、オブザーバー等13名、計40名。

日本点字委員会第61回総会

委員22名中17名が参加しており、また4名から委任状が提出されているので、会則第11条により、総会は成立することを確認した。

1. 2024年度事業並びに決算報告が承認された。

〔事業報告要旨〕①2024年度日本点字委員会研究協議会並びに第60回総会を、2024年6月8日（土）、日本ライトハウス情報文化センター及びオンラインで開催した。②『試験問題の点字表記』改訂版編集委員会を、年度内に3回開催した。③「日本の点字」第49号及び「日点委通信」No. 40を編集・発行した。④書籍等の頒布を行った。⑤「点字考案200年記念事業推進委員会」に加わって、各種事業に取り組んだ。⑥各種事務処理並びに諸連絡、事務局会の開催、ホームページに寄せられた各種問い合わせに対する対応等を行った。

2. 2025年度事業計画案及び予算案が承認された。

〔事業計画要旨〕①6月7日（土）に2025年度研究協議会並びに第61回総会を、日本点字図書館多目的室とオンラインの併用で開催する。②『試験問題の点字表記 第3版（案）』を公表し、5月末まで意見募集を行った後、意見等を集約し、年内に発行することを目指す。③「日本の点字」第50号及び「日点委通信」No.41を編集・発行する。④『日本点字表記法 2018年版』をはじめとする書籍頒布を継続する。⑤2025年は点字考案200年に当たり、引き続き関係団体と協力し、有益な事業を企画・実施する。また、文字としての点字の位置づけをより明確にするよう、引き続き要望していく。⑥諸外国における点字に関する新たな試みについて、こまめに情報収集を行い、必要な対応を検討する。⑦事務局会を毎月開催する。必要に応じて正副会長会議をオンラインで開催する。⑧引き続き、日本点字委員会が過去に発行した点字表記法のデータ化を進める。⑨その他、当委員会の目的達成のために必要な事業を行う。

2025年度日本点字委員会研究協議会

研究協議（1）

1. 『試験問題の点字表記 第3版（案）』に対する意見交換

『試験問題の点字表記 第3版（案）』に寄せられた14名からの意見のうち、研究協議会で検討が必要な10項目が挙げられた。各項目について逐条的に討議し、その方向性を見いだしたので、『試験問題の点字表記』改訂版編集委員会に送り、発刊に向けて審議してもらうこととした。

研究協議（２）

２．阿佐博著『日本点字史概論』（仮称）構成の試み（金子昭委員）

〔要旨〕阿佐博氏は、点字の歴史について、広い範囲にわたって書き残しているが、それらがいくつかの書籍に分散していることが多い。それらを項目順にまとめて一冊の書物として上梓するなら、氏の点字史概論の体系が組み立てられるのではないか。そのことを仮想し、目次と概要を一つの資料にまとめてみた。

３．戦後の点字仮名遣いについて——日本点字委員会は、国語審議会に何を要望したのか——（金子昭委員）

〔要旨〕戦後の点字仮名遣いは、「現代かなづかい」（1946）との対応・整合性を考えることであった。その過程で、「現代かなづかい」の改定に当たり、日点委は２度にわたり、国語審議会に意見書を提出した。「助詞を〈わ〉〈え〉と書ける許容を残して欲しい」という趣旨であったが、「改定現代仮名遣い」（1986）では、「助詞を〈は〉〈へ〉と書くことは、定着したから」ということで、この許容は削除された。その後点字では、従来の書き方を継続することとした。

４．一般日本語文章中の英語にUEBを用いた事例——「表記法」４章６節の軽微な修正に関連して（福井哲也委員）

〔要旨〕ローマ字の表記について取り上げる。2024年度の文化審議会のまとめで、ローマ字における長音の表記の仕方について取り上げられている。UEBの修飾符で長音のサーカムフレックスやマクロンを表すようになると煩雑である。かといって、従来のアクセント符をUEBの中で使うわけにはいかないなどの問題が出てくる。今後の点字教科書に与える、このような影響について考察する。

５．数符から始まる数式にも数式指示符を——日本語文中の数式表記の体系を考える（福井哲也委員）

〔要旨〕実際に算数・数学の教科書などを点訳しようとする、書き方がよく分からなかったり、処理しにくかったりすることに遭遇する。問題の多くは、日本語表記と数式表記の切り替え部分で発生していると考えられる。ベースとしての日本語点字体系の中での数式表記の扱いに焦点を当て、日本語モードと数式モードの切り替え規則の明確化という観点で、問題提起と提案を行う。

日本点字委員会

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-11-14-102 桜雲会内

振替口座 00100-1-42820

Eメール nittteni2021@gmail.com

ホームページ <http://www.braille.jp/>